

研究成果普及計画書

助成年度：平成10年度

研究課題：ミャンマー・タイのカレー麺伝播と変容における回族の役割

研究機関 (H.10 年度)：大東文化大学国際関係学部

代表研究者：吉松久美子

1. 研究課題・内容の主旨

回族は西アジアから中国へ移住してきたイスラム教徒の末裔で、定住後も、官吏、軍人、技術者、交易商人として活躍した。雲南省は回族居住の中心地の一つで、彼らは馬幫と呼ばれる隊商を組織し、交易圏を東南アジアに広げていった。

その交易路は中国で政変が起こるたびに避難路と化し、回族のさらなる南下を押し進めた。交易路沿いに彼らの定住地が出現し、定住先でも一つの民族集団として認識された。ミャンマーではバンデー、シャン州ではパシー、タイではチンホーと呼ばれた。

彼らはイスラムという宗教的制約のもとに、新天地で新たな食体系を構築したが、本研究では東南アジアで新に生み出された「カレー麺」に焦点をしばって、その伝播と変容を探った。

2. 研究成果のアピール・ポイント

回族は移住の過程で、小麦の切り麺を使った伝統的な麺料理を東南アジアに広める役割を担った。ミャンマーではバンデー・カウスエ（「回族・麺」）、タイではカオソイ・ホー（「麺・回族」）と呼ばれる民族名を冠した麺料理がある。回族の「湯麺」を応用したものである。麺屋は移住先でしばしば商売の起点となったために、商品も現地化されたのである。

バンデーカウスエはビルマ人の手食に合わせて「湯麺」からスープを除き、調味料の合わせ汁で煮込んだ肉煮込みを麺にかけるものとなった。1911年にパティンで雲南省騰冲から移住した回族が初めて売り出したとされている。インド人が多数を占めたヤンゴンへ入ると調味料にマサラが加えられた。さらに南へ下った沿岸のベイでは、昆明出身の回族が現地特産のココナツミルクを煮込みに加え売り出した。交易路に沿って商品が変容した様子を窺うことができる。

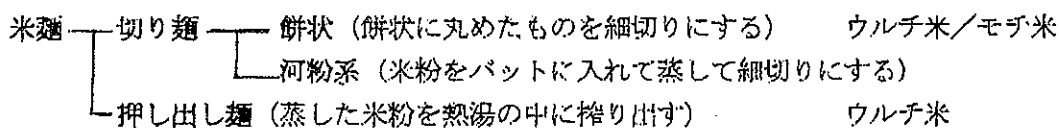
タイのカオソイホーも同様にチェンマイに定住した回族によって1910年頃に商品化された。こちらはスープを少なめにした「湯麺」であるが、中国系調味料が使われている。ところがチェンマイのカオソイホーが「ムスリムのカレー麺」とタイで呼ばれるようになると、チェンマイ以南のタイムスリムの間にはマサラで煮込む麺料理として広がるようになった。これは過去20~30年間のことである。

チェンマイのカオソイホーは仕上げにココナツミルクを加えるため、ミャンマーのオンノカウスエ（「ココナツミルク・麺」）と似かよって見える。しかし、ヤンゴンで誕生したココナツミルク煮込みのオンノカウスエとチェンマイのカオソイホーでは料理法が異なり、同系列とは考えにくい。ただ、「飛び地的」出現したチェンマイのココナツミルクにはモーラマインを往復した回族馬幫の南方交易が関わったのは間違えないだろう。

以上のように本調査で「カレー麺」と呼ばれる麺料理の出現と変容に回族がどのように関わったかを明らかにすることができた。

3. 研究成果に対する進捗ならびにその発展性

タイやミャンマーには小麦粉だけでなく米粉の麺もある。以下が簡単な分類である。



この米麺の伝播にも回族が関わっていたことが今回の調査で示唆された。シャン州東側では1890年代にチャイントンへ移住した回族が石臼とともに河粉系の麺を紹介し、シャン語で「カオ (米) ソイ (切る)」と呼ばれた。カオソイホーとは正確には「ホーの切り麺」ということになる。

ところがシャン州西側でカオソイと呼ばれているのは、河粉系麺ではなく、モチ米の餅状切り麺であった。また餅米嗜好圏のシャン州で米の押し出し麺にはウルチ米が使われ、ヤンゴンではむしろこちらがシャンのカオスエとして知られている。この変容伝播にもマンドレーの中国人が関わっている。

このように小麦粉の麺だけでなく、米粉の麺もその伝播を知る上で回族の移住と遠距離交易の視点が有効になるだろう。

4. 研究成果に対する活用と今後の展望

上記の米粉の麺に加え、インド系の人々が食するモントンザと呼ばれる極細の米の押し出し麺がある。これは他とは製法が異なり、また甘味として食されている。他にも麺には豆粉から作られるものもある。今後はこれらの麺とその調理法について調査を行い、多様な麺料理の相互関係を明らかにしたい。

5. 代表研究者として研究に関連する自己アピール

研究成果の詳細はA4版24枚(含む写真)にまとめられて、2000年5月に助成金研究報告書として財団へ提出された。その後『アジア遊学 特集食の風景』(No.21)で「タイのカオソーイ物語」を發表し、さらにミャンマーの回族調査をまとめた『中国人ムスリムの末裔たち—雲南からミャンマーへ』を上梓、第10回小学館ノンフィクション大賞優秀賞を受賞した。

その後も研究を続け、平成17年度から19年度までは、東京経済大学松本光太郎代表の科研費基盤研究「中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究」に研究協力者として参加し、最終年度となる本年度は国際シンポジウム「移動する中国ムスリム：ヒトと知識と経済を結ぶネットワーク」を11月25日(日)に早稲田大学で開催する。